

インタビュー課題

「伝統漢方ーからさわ薬局」

北海道大学経済学部経済学科

橋本ゼミ3年

学生番号：01135026

豊島由里子

今回のインタビュー課題にあたり、インタビュー先としてからさわ薬局の唐澤豪貴（からさわひでたか）先生に協力して頂いた。私は以前から漢方医学に興味があったものの、直接伝統的な漢方薬局の先生にお話を伺えることはなく、これまで抱いていた疑問を解消する貴重な機会となった。

レポートの形式としては、質問内容とその答えをまとめ、インタビュー後に個人的に調べた内容を脚注で補足したものとする。

1. 「伝統漢方とは何か？中医学との違いは？」

からさわ薬局の看板には「伝統漢方 からさわ薬局」と書いてある。伝統漢方とは何か。そして漢方＝中国の医学と思いがちであるが、漢方と中医学は違うものなのか、それとも同じものなのかを伺った。

からさわ薬局の言うところの「伝統漢方」とは、いわゆる漢方医学のことを示す。単なる漢方ではなく、“伝統”漢方と呼んでいるのは師匠の影響だそう。漢方と中医学はほとんど別のものと言っても過言ではない。漢方は古くに中国から伝わったものであることは確かであるが、伝わった後に日本人の体質や日本の環境に合わせて独自の進化を遂げた。日本では国内で栽培できる生薬の種類も限られている。そのため、限られた生薬から作られる、限られた種類の処方薬を、いかに様々な症状の改善に使いこなすことができるのか、という繊細な技術ⁱが日本では求められ、それが漢方医学の独自性へと繋がっていった。また、腹診法は漢方独自の診断方法である。

2. 「漢方医学が得意とする分野は何か？」

漢方と言えば慢性的な病気や体質改善に効果を発揮し、急性の症状の改善などは不得意という印象がもたれやすい。そこで「漢方医学が得意とする分野は何か」と質問してみたところ、想像していたよりも、漢方薬はより広い範囲で用いることができるそう。いく

ⁱ 江戸時代の漢方医、和田東郭の「方を用ゆること簡なる者は、その術日に精し。」（たくさんの薬方をあれもこれもと使う者より、少ない薬方を縦横無尽に使える者の方が腕が磨かれる。）（和田東郭医訓）という言葉からも、漢方の独特の考え方がみてとれる。

つかの事例を挙げて説明をして頂いた。

事例1) ぎっくり腰

ぎっくり腰は一度なったら暫く動けなくなることが多いという印象があるが、漢方薬を用いると僅か1日ほどで立って歩けるようになる。骨格系かつ急性のものでも漢方薬は効果を発揮する。

事例2) 手術後の炎症

手術後の炎症がなかなか良くならない患者に対しても漢方薬が使えるそうだ。漢方薬は化学薬品的な働きをすることもある。

事例3) 痔ろう

痔ろうは肛門のまわりにでき、直腸と皮膚をつなげて膿を出す痔である。西洋医学で痔ろうは薬物治療はできず、大掛かりな手術が必要となる。しかしここでもある漢方薬を用いることができる。しかし、何故その漢方薬を飲めば治るのかというメカニズムは分かっていない。

痔ろうの例でも述べたように、漢方薬の中には何故症状の改善に効果があるのかといメカニズムが分かっていないものも多い。医師や薬剤師は過去の事例やパターンを体系的に整理して処方する漢方薬を選定している。

以上に挙げた例より、漢方医学は想像よりもはるかに広い分野で効果を発揮することが分かる。しかし広い範囲で使える分、特に漢方薬局では全ての症状に対応していることは少なく、薬局ごとに得意分野をもっている。からさわ薬局の得意分野は以下のようなものである。

<からさわ薬局の得意分野、相談が多い分野>

- ・ 不妊・習慣性流産
- ・ 腰痛、坐骨神経痛不妊症など骨格系の病気
- ・ 自律神経失調・不安神経症など心のご病気
- ・ 掌蹠膿疱症、女性に多い慢性的な手あれ
- ・ 痔（痔核、脱肛、痔ろう、特に産後の痔）

3. 「患者の層は？」

からさわ薬局を訪れる患者の層について尋ねた。平日と土曜日の18時までという営業時間のため女性が多い。しかし、年齢層は問わず、土曜日や時間帯によっては男性も来るそうだ。ほとんどの患者は、からさわ薬局のホームページを観てから訪れるため、訴える症状は前述した、からさわ薬局の得意分野に沿うものが多いようだ。患者の中には、西洋医学での治療を受けている者や様々な病院で治療を断られた者も多いそうだ。初めから漢

方医学を信頼している患者ばかりではなく、紹介でからさわ薬局を訪れ半信半疑で治療を始める患者も少なくない。

4. 「診断方法は？」

漢方医学では西洋医学とは全く異なる診断方法を用いる。まず、漢方薬を選定する前にすることは、「四診」と呼ばれるものである。「四診」は「望診（ぼうしん）」→「問診」→「聞診（ぶんしん）」→「切診（せっしん）」で構成されている。望診では患者の顔色は舌を診る。舌を診ることは「舌診」と呼ばれる。問診では患者の訴える症状や体質などについて詳しく聞く。聞診では患者の声の状態や、咳をしている場合はその咳の様子などを手掛かりにする。そして、最後は切診で脈を診たり（脈診）、腹を触って様子を調べる（腹診）。切診では患者に触れて体のより深い部分についての情報を集める。薬剤師でも患者の体に触れても罰則規定などは存在しない。例えば在宅医療などの際には、薬剤師も患者の体に触れて診察する必要がある。しかし、一般的には薬剤師は医者領域を侵してはならないという考え方が業界に浸透しているため、漢方薬局でも切診を行うところは少ない。また切診を行ってもなお、患者の病態について正確に判断ができなかったり、治療の為に用いる漢方薬の選定に迷ったり、ということがある。そこで、からさわ薬局では切診に代わって「糸練功（しれんこう）」という医療気功を用いて、漢方薬の選定を行っている。

5. 「糸練功とは？」

糸練功とは医療気功の一種であり、患者の経気ⁱⁱの異常を調べることができる。これにより、漢方医学の治療でも難しかった病気に対してもアプローチすることが可能である。糸練功は入江式FT（フィンガーテスト）を発展させた技術である。入江式FTでは、人は異常をキャッチしたときには筋力が弱まるという現象を利用する。片手で患者の経気を感じ、もう片方の手では親指の爪側の面に人差し指を滑らせる動作を行う。この滑らせる動作のしやすさによって経気の異常の有無を調べる。異常があればこの動作はしにくくなる。入江式FTを開発された故・入江正先生によれば、東洋医学とは体表解剖学である。入江式FTを発展させた糸練功によって、患者の体表に表れているより多くの情報を得ることができる。処方する漢方薬を選定する場合にも糸練功は有用である。唐澤先生によると、患者にある漢方処方を持ってもらい、それが本当に症状改善に効くのであれば、患者の体表に表れている経気の異常が消えるそうだ。

では、この糸練功はどのようにしたら体得できるのだろうか。気功と聞いたら超能力的

ii 経気：経絡の経脈を流れている気のこと

経絡：気や血が流れる通路

経脈：経絡のうち、からだの縦方向に伸びているもの

気：漢方医学では、人の体は気・血・水から構成されていると考えられている。

なものを想像してしまいがちだが、唐澤先生によれば、気功は練習すれば誰でもできるようになるそうだ。練習でまず初めに、冷たい缶ジュースにタオルなどを巻いたものを用意してそれに手をかざして気を感じる練習をする。分かりやすい気からより繊細な気を感じることが出来るように練習していく。とはいえ「気」という概念も現代では中々理解しにくく、気功というのも中々怪しげな世界である。唐澤先生もそう思う一人であったそうだ。そんな先生が初めて「気」を感じたのは師匠に言われて、白水晶と紫水晶に手をかざした時。白水晶の上でしばらく手をかざした後に、紫水晶の上に手を移動させたら、その違いに一瞬で気が付いたという。白水晶は瀉（しゃ）の気と呼ばれる発散性の気を持っており、手をかざすと押し返すような感覚がある。一方で紫水晶は、捕の気を持ち、手をかざしたら吸い込むような感覚がある。この経験をしてから、先生は「気」を少しずつ感じることが出来るようになったという。この感覚は自身の体調や、患者と自分の姿勢などによっても変化する。先生は今でも毎日、生薬の気をみる練習は欠かさないそうだ。

6. 「生薬はどこで手に入れるのか？日本の生薬の市場とは？」

日本の生薬問屋は主に、大阪の道修町に集中している。生薬の大半は輸入したものであるが、中には自給率100%の生薬も存在する。当帰（とうき）や川芎（せんきゅう）がそれである。北海道でも生産が多く、大手製薬会社が新たに工場を新設するなど、今後も生産量が増えていくことが見込まれる。有毒植物として知られるトリカブトも、子根を乾燥させて附子（ぶし）という生薬として用いられる。北海道では銭函海岸沿いに自生している。

ちなみに中国の古典では薬は3つの種類に分けられる。誰が飲んでも副作用がなく、少量を長く飲めば長寿になる上薬（じょうやく）。病気の時に用いて副作用の少ない中薬（ちゅうやく）。病気の時に仕方なく用いる下薬（げやく）。附子なども下薬に属し、効き目が強い分、量は最小限で、投与期間は短いことが望まれる。

7. 「漢方薬の料金は？」

漢方薬局で購入する漢方薬は、医師によって処方されるものとは違うため保険がきかない。よって少々値段は高くなってしまふ。からさわ薬局では一日あたり400~500円が多く、一か月あたりにすると1~2万円、高い人でも1日あたり700~800円である。料金については事前に相談が可能であり、全く手の出ないものではないだろう。値段をより下げるためには、いかに少ない種類の漢方薬で患者の訴える多くの症状に適応させるか、という漢方薬の選定技術がより重要になる。

8. インタビューを終えて

インタビューを終えて、私は改めて「漢方の世界」が好きになった。漢方の世界の奥深さ、ある種の“怪しさ”とその魅力に存分に触れることができたからだ。

私はインタビュー前から、体調不良の際には漢方薬を服用したり、独学で漢方の基礎的な理論を本などで勉強したりして、漢方の世界には慣れ親しんでいた。しかし、漢方には常に様々な誤解がつきまとう。それは誤解というより、偏見に近いものである。「漢方＝怪しいもの」というイメージが先行して、漢方を学んでいたり、漢方に頼ろうとしたりすることで、「怪しいことにはまっている人」と認識されたこともある。このようなことは決して私の周りだけのことではなく、医療業界でさえ似たようなことが起きているそう。確かに漢方は怪しい。西洋医学に慣れ親しんだ現代人にとっては、効くメカニズムが分かっていない漢方薬など、魔術的なもので怪しいものである。そして気功はさらに怪しい。「天気」「空気」「元気」「気力」「内気」など様々な言葉に表れているように、「気」という概念は昔の日本人にとって当たり前のことであった。しかし現代の日本人は「気」という概念を聞いたら、どこかスピリチュアルな印象を持つだろう。私も、この「気」の概念はいまいち理解できていないところがある。今回のインタビューでは先生に糸練功という医療気功について詳しく解説して頂き、実演して頂いた。中でも生薬の「気」をみる練習を実演して頂いた時、私は強い衝撃を受けた。「気」というものは「みる」ことができるものなのか。先生には、どんな世界がみえているのだろう、と思った。色々なことを信じやすいという私の性格もあるだろうが、確かに先生には「気」を「みる」ことのできない私達とは全く別の世界が広がっていることを感じた。インタビューの中で先生は何度も、自身の行う「気功」が怪しいと思われてもしかたないということ（先生自身も怪しいと思っていた時期があるそうだ）、そして目の前で実演したからといって信じてもらえるものではない、ということは何度も仰っていた。漢方も気功も何千年もの歴史がある。その歴史の上で生まれた「糸練功」という「技術」を私は信じたい。それは漢方も同じである。例えば、現代人でもなじみ深い「葛根湯」は2000年以上も前に生まれ、生薬の配合も一切変わらず飲み続けられている。現在でも葛根湯を超える効用をもつ薬は生まれていないそうだ。当たり前のように「気」を感じる事ができた昔の人だから生み出すことができた薬なのかもしれない。漢方が怪しい世界のように感じられてしまう現在でも「葛根湯」が飲み続けられているのは「葛根湯」は効くと体で分かっているからだ。現在の医学では証明のできない何かは2000年以上前に生まれた「葛根湯」に秘められているというだけで、私は漢方の世界に強く興味を惹かれる。しかも、漢方薬は「葛根湯」だけではないのだ。例えメカニズムが分かっていなくても、確かに効く薬が漢方薬なのだ。漢方の何千年にもわたる歴史の中には様々な可能性が詰まっている、とインタビューを終えて強く感じた。

最後に大変忙しい中、急な依頼にも関わらずインタビューに御協力してくださった唐澤豪貴先生に重ねて感謝したい。